

横にはなつたもの、雨には濡れて居、殊には冷氣も一入増して、身體はふるく慄へて居る。

昨夜よりも尙は辛いなア。

それはさうさ、昨夜は火なんぞを焚いたから。

又火でも焚かうか。

だツて焚くものも焚く場所もないじやないか。

困つたなア。

如何程困つても更らに妙案も浮ばないので、仕方なく諦らめて横になつて。

轉々殆んど一時間ばかりは煩悶して居たが、それでも疲れと睡魔に襲はれて、何時とは知らずに眠つたのであらう、眼が覺めれば夜ははのくくと白んで居た。

雨は名残なく晴れて、二ツ三ツ四ツの星影が、未だ西の空に瞬いて居る。

今日は大丈夫天氣だよ。

と喜び勇んで、未明より歩き出した。

二三里も歩いたと思ふ頃、澁川といふへ出た、懐中には早や一圓ばかりさへなければ、高崎へ往けば磊々子の友人が歸つて居る筈故、氣を強くして、兎に角朝飯をしたゝめるべく茶店へ飛び込んだ。

もう前橋までは僅かのこと故、格別金の要することもないからと、茲に一圓の若干を割いて酒と飯とをたらふくを詰め込んだ。

久しぶりで酒の味、嘗めたので、磊々子も我も甚だ元氣よく、勘定を済まして往來へ出れば、旭日は早や餘程上つて、赫々とした光が山や野の凡てを染めて、草や木は生々として甦へつたごとく、而して我等も又更らに甦へつたごとく。

ふらりと前程に進みつゝ、山や野の美事なる景色を賞しながら、疲れも忘れつ只管に進めば、早や正午頃には前橋へ。

茲には縣廳もあれば學校もあり、兎に角群馬縣の都會であれば、見物するの價値もあ

横にはなつたものゝ、雨には濡れて居、殊には冷氣も一入増して、身體はふるゝ慄へて居る。

昨夜よりも尚は辛いなア。

それはさうさ、昨夜は火なんぞを焚いたから。

又火でも焚からうか。

だつて焚くものも焚く場所もないじやないか。

困つたなア。

如何程困つても更らに妙案も浮ばないので、仕方なく諦らめて横になつて。

轉々殆んど一時間ばかりは煩悶して居たが、それでも疲れと睡魔に襲はれて、何時とは知らずに眠つたのであらう、眼が覺めれば夜はほのくくと白んで居た。

雨は名残なく晴れて、二ツ三ツ四ツの星影が、未だ西の空に瞬いて居る。

今日は大丈夫天氣だよ。

と喜び勇んで、未明より歩き出した。

二三里も歩いたと思ふ頃、澁川といふへ出た、懐中には早や一圓ばかりさへなければ、高崎へ往けば磊々子の友人が歸つて居る筈故、氣を強くして、兎に角朝飯をしたゝめるべく茶店へ飛び込んだ。

もう前橋までは僅かのこと故、格別金の要ることもないからと、茲に一圓の若干を割いて酒と飯とをたらふくを詰め込んだ。

久しぶりで酒の味 嘗めたので、磊々子も我も甚だ元氣よく、勘定を済まして往來へ出れば、旭日は早や餘程上つて、赫々とした光が山や野の凡てを染めて、草や木は生々として甦へつたごとく、而して我等も又更らに甦へつたごとく。

ふらりくと前程に進みつゝ、山や野の美事なる景色を賞しながら、疲れも忘れつ只管に進めば、早や正午頃には前橋へ。

茲には縣廳もあれば學校もあり、兎に角群馬縣の都會であれば、見物するの價値もあ

らんと、町端れから仔細に見物しながら、右に往き左に折れ、隅から隅と、殆んど歩
きつくして、漸く停車場に至れば、早や構内の時計は午後三時を打つた。
さすがは縣下の都會であるだけ、停車場の雑沓は一通りでない、我等は構内の一隅に
小さくなつて、群集の視線と避けて居た。
何うする磊々子、之から高崎まで歩かうか、或は之から瀛車に乗つて往かうか。
さうだな、もう殆んど野宿旅行も終つたから、之から瀛車に乗らうよ。
そんならそうしようよ。

と、茲に相談を決して、瀛車に乗るべく切符を購へば、餘す所は僅かに十錢銀貨が一
ツ。

高崎へ着いたのは午後四時頃であつた。

茲まで来ればもう大丈夫、薦も笠も必用はないから捨て、往かうじやないか。

と餘りに異様な風采に磊々子の友人を驚かすも妙でない、態と遠慮して言へば。

馬鹿言ひたまへ、之が我々に價值のある所じやないか、捨てたまるもんか。

そんなら紀念として保存でもして置くかい。

そうさ、大に紀念として珍重すべきもんだ、幾多の風雨に晒されて、以つて我々に忠
大なる助力を與へたのだから。

義なものかな。

大に然りさ。

と、二人相も不變薦を纏ふて、高崎の市中を練り歩きつゝ、右に折れ左に折れて、漸
く目指す家へ。

その家に到れば、磊々子の友人は切りに珍らしがつて、水を出すやら草鞋を脱がせる
やら、勿體ない待遇。

足を洗つて座敷に導かれ、ば、今更我等の風采が耻かしく、我れ一人のみ赤面して居
れど、磊々子は一向平氣なもの、之は僕の友人だから、と紹介するに、ハア左様で

すか、初めて、など、惜れもせぬお世辭を振り撒いて、やがて挨拶も済めば、酒が出る肴が出る、東京以來の御馳走。
その夜は久しふりで穩かな夢を結び、翌日になつて汽車賃を頂戴するやらお土産を頂戴するやら。
そのまゝ、汽車に飛び乗つて東京へ。

野宿旅行 終

明治三十五年八月二十九日印刷
明治三十五年九月一日發行

(野宿旅行)
正價二十五錢

著 者 鐵 脚 子

發 行 者 岩 崎 鐵 次 郎

印 刷 者 日 置 市 二

印 刷 所 小 川 印 刷 所

著 作 所 有 權

東京市神田區鍛冶町十七番地
東京市神田區鍛冶町三丁目一番地

發 兌 大 學 館

東京市神田區鍛冶町十七番地
電話本局 三〇六七番

池田錦水君著
女心の解剖
 正價 三十錢
 郵税 四錢

緒言
 解剖の順序
 容貌美人十人並醜婦
 年配老婆一年増新造
 風土關西婦人關東婦人
 人海邊婦人山田
 園婦人都會婦人
 職業女教師女藝師
 匠歌舞音曲の師
 看護婦按摩師
 髮結女工女外母
 下女役者娘
 洋妾見世物藝人
 義太夫娼妓鴉片母
 妻酌婦賣淫婦
 義女將令嬢女學生町
 處女阿魔
 娘外婦人後家一貫の心情
 緒論(婦人一貫の心情)

墨堤隱士著
日本富豪の家
 正價 廿五錢
 郵税 四錢

三井家の家憲
 松屋呉服店の家憲
 大丸の家憲
 中澤家の家憲
 山本家の家憲
 升本家の家憲
 鴻池家の家憲
 本間家の家憲
 岩崎家の家憲
 住友家の家憲
 安田家の家憲
 澁澤家の家憲
 白木屋呉服店の家憲
 菊池家の家憲

村上濁浪君編 寫真版數葉入

世界第一譚

目次大要

正價廿五錢 郵税四錢

◎世界第一瀑布の探險◎世界三大不思議
 ◎世界第一金剛石の來歴◎長壽者傳◎世
 界第一英雄シーザル◎古今大物盡◎奈良
 大佛◎世界漫遊記◎英國珍物博覽會◎世
 界第一義士墓と遺物◎赤穂義士の逸話◎
 世界一の力持と鬚男◎世界第一烈婦ジャ
 ンダーク◎世界名物膝栗毛◎世界第一餘
 談◎歐米の世界第一◎世界第一淑女徐世
 賓◎人類學上の世界第一◎世界第一高山
 比馬拉登嶽記等二十數件

村上濁浪君著

冒險旅行術

正價廿五錢 郵税四錢

冒險談としては、熱帶、寒帶、沙漠、高
 山、森林、溪谷、瀑布等猛獸怪鳥の彷徨
 ぶ巷、瘴烟毒霧の漲る處を極め、奇々怪
 々、壯快痛絶の材料を收む、且つ、敵地
 通行術、或は、登嶽の心得、渡航の準備、
 苟くも、冒險旅行を試みんと欲する者の
 爲めに必須の條件を詳悉したり、されば
 一讀多趣味なるのみならず、實行上有益
 無比の書なり。

原田東風君著 岡落葉君畫

野宿旅行

正價廿五錢 郵税四錢

汽車に乗らず、汽船を藉らず、二本の毛
脛に七寸の草鞋、青天井に草枕、三個の
青年が、行人の眼を驚かして、奇行を演
じたる、滑稽無類の旅行記なり、消夏の
友として無比の珍本たるのみならず、世
の柔情者輩を警醒せしむるに足る。

原田東風君著 岡落葉君畫

奇談 貧乏旅行

正價廿五錢 郵税四錢

囊中常に乏しければ、旅籠屋に樂々と寐
る事難く、風采汚ければ、往々行人に冷
遇せられ、菅笠一蓋、薦一枚を便として、
進めば愈々究し愈々究すれば一計生じ、
此に、果實盗人となり、橋錢の誤魔化し
となり、失策となり、遁走となり、奇談
百出、珍話頻に生ず、これ亦野宿旅行と
相併んで、消夏の好同伴、且つ旅行を企
つる者に無上の案内書なり。

墨堤隱士著 肖像寫真版入

大臣の書生時代

正價三十錢 郵税四錢

明治の大臣三十六人が其書生時代に於け
る**刻苦勉勵**せる逸話、詩を吟じ
劍を舞はしたる奇談、總て短褐弊衣の壯
態を描き出して、面目躍如たり、**大禮**
服に勳章を帯びて威儀堂々たる
現今の風采と比較一番せば實に**無比**
の**興趣**を覺ゆのみならず、得難き
教訓と興奮を味ふ可し。

平野紫陽君著 岡落葉君畫

文學奇瑞譚

正價廿五錢 郵税四錢

目次大綱

◎雨を祈り又雨を止めたる事◎疾病を癒
せし事◎禽獸草木を感せしめし事◎神人
唱和◎神人を感動せしめし事◎不吉を變
じて人の心を安からしめし事◎罪禍を脱
し又罪禍を招きし事◎人に侮られず且つ
品位を高めし事◎望を達する事◎名號を
得たる事◎恩賜に預る事◎位階を得たる
事◎他人の詩歌を應用する事
これを更に細目に分ちて數百事項

墨堤隱士著
岡落葉君畫

正價廿五錢
郵稅四錢

明治富豪致富時代

果報は 寐て待つと 棚の上の
牡丹餅は 雖も来らず 懐合
掌禮拜は 笑ふべきかな
明治の富豪家 素寒貧 なり、眞裸
かろの始めは 神の機敏潤大
なる眼識とは 此巨萬の財産を 獲取せり、
幸運か 僥倖か 本 五十萬圓以
書悉く之を説く 家の一覽表を 附
録とす。

押川春浪君著
岡落葉君畫

正價廿五錢
郵稅四錢

世界怪奇譚續空中大飛行艇

「空中大飛行艇」を
愛讀せし諸君は 美人 飛行艇よ雲
漠々 霧濛
一大警報 巴里全市を震駭せしめ
空中飛行艇の事實を知る可し
行艇か 瘴烟毒霧 指して 美人
搜索の間に起る 怪事と 珍話
とは讀者殆ど五里霧中に迷ひ、肌粟を
生し手に汗を握り、動悸の静まる事な
るべし、已にして、東天旭日上り、大洋の
波濤陸離として、大勝利を博して、歸りたり、全
大飛行艇は、大勝利を博して、歸りたり、全
市の大歓迎 局に到つて

蛟龍子編

正價廿五錢
郵稅四錢

明治卅
五年三
月調査

男東京學校案内

遊學 第一方針は學校へ入學する
己の性能に應じたる學術を専修するには
先づ學校を選択せざる可からず、
東都の地學校の數頗る多く千餘に上るべ
きも、正當なるものは僅に十分の一に過
ぎず、これ通學青年の最も考慮せざる可
からざる 最近の調査を 百三
十餘校を 選み、卒業後の規則、名稱、經
験科目、修業年限等、責任を帯びて記述
せるものなり、
男女遊學者の爲には無比の案内者
無比の良友なり。

井上啞々君著
岡落葉君畫

正價廿五錢
郵稅四錢

遊學書生

著者の序文に曰く
本書を讀んでもし眼を怒らすものあらば
幸に墮落の淵に沈むの苦を免る書生さん
なる可し
本書を讀んでもし膽を潰すものあらば幸
に可憐息子を臺なしにする厄なき親爺さ
んなる可し
もし本書の文の拙なるを嘲り記述羨
足らざるを嘲るものあらばこれ羨
ても 焼ても 喰へぬ奴
なりと
本書は一個無邪氣無垢の青年が東都に遊
學中の周囲の汚俗と悪友の誘導に依て
不識不知墮落する傾向を小説的に畫きた
るものにて新書生氣質と稱す可き書なり

長田偶得君著
岡落葉君密畫

三逸事
奇談 明治六十大臣

正價三十錢 郵税四錢

明治十八年内閣の改革以來大臣の職に上

つた**總計六十人**者例の健筆

を揮つて**大禮服と拔**き去つた**眞**

裸其儘一讀噴飯**抱腹絶**

倒

岩崎徂堂君著
岡落葉君密畫

三版
中江兆民奇行譚

肖像筆蹟挿入 正價廿五錢 郵税四錢

兆民居**一世の奇才**なり、奇言

奇行世を駭し、舌鋒劍の如く活動雷の如

し、嗚呼此**不治の病**に罹つて病

今にして**奇言奇行**を蒐め以てこ

り。

宮崎來城君著

鄭 成 功

正價卅五錢 郵税四錢

鄭成**國姓爺**の名を以て從來稗史小
功は日本人に深く記憶せられ演劇に仕組
まれたり、而かも未だその**完全な**
實傳あるを見ず

宮崎來城先生嘗て**支那臺灣を遊歴**し

珍奇斬新の材料と頗る豊

富此に先生、**謹嚴**而かも**瑰麗**の
筆硯を新にし、**謹嚴**而かも**瑰麗**の
筆硯を新にし、**謹嚴**而かも**瑰麗**の

が近**最も苦心の餘**の以て青
著中**最も苦心の餘**の以て青
年子**好讀本**たるを期せられたり。

生田葵山人著

貴 族 の 戀

正價參拾錢 郵税四錢

生田**思想豊富**にして筆力**青**

葵山氏**思想豊富**にして筆力**青**
年作家中**天才**の名あり

貴族の戀一篇は葵山氏か苦心慘憺の作な

り、**上流社會の戀愛**を描

運筆極め**妙齡芳顔の一令**

嬢は二箇の紳士を蹴弄する所の如き**神**

手の感あり

池田錦水君著
岡落葉君畫

定價廿五錢
郵稅四錢

無錢修學

本書の目的は青年が苦學力行を獎勵するに在り、因循姑息の念を除去するに在り、獨立自活の法を教ふるに在り、目次左の如し

- 第一 立志 郷關を出つ
- 第三 雇店 店の出逃
- 第五 就學 大難の失敗
- 第七 文字 知らぬ大漢學者
- 第九 乞食 小僧の貧家捜し
- 第十一 糞尿 坊主の仲間入
- 第十三 無資本の獨立營業
- 第十五 車夫 活
- 第十七 精神一到 何事か成らざる
- 第二 巡查 相手に大氣焔
- 第四 無錢 就職の第一着
- 第六 空腹 苦痛
- 第八 立ん坊 自ら助くる者を助く
- 第十 三托鉢 坊主の案内
- 第十二 空前 絶後の狼狽
- 第十四 意外 の大珍事
- 第十六 暗 中の拔刀

附録 學生自活法

池田錦水君著
小山榮達君畫

定價廿五錢
郵稅四錢

奧様と嬢様

奧様

嬢様

- 其一 奧様如何
- 其二 經濟
- 其三 技能
- 其四 理想
- 其五 嗜好
- 其六 娛樂
- 其七 滑稽
- 其八 言語
- 其九 動作
- 其十 職務
- 其十一 社交
- 其十二 奧様に寄す

- 其一 嬢様如何
- 其二 世間的智識
- 其三 學術的智識
- 其四 藝術的智識
- 其五 希望
- 其六 嗜好
- 其七 遊戯
- 其八 舉止
- 其九 言語
- 其十 實際
- 其十一 將來
- 其十二 嬢様に寄す

池田錦水君著
岡落葉君畫

定價廿五錢
郵稅四錢

戀の一年有半

(版再)

一年有半に於ける戀愛は如何に多様に如何に夢幻に人情の波瀾常なく浮世の轉換極なきを活寫して、讀む者先づ仙境に遊ぶの感あり、已にして涕淚滂沱禁ずる能はざる可し。

戀愛の原書を知つて、まだその疑ひあるもの數多と寫本の中先づ第一に本書を繕いて可なり。

池田錦水君著
小島冲舟君畫

定價廿錢
郵稅四錢

婦人と戀愛

(版再)

目次

- | | |
|-----------|------------|
| 第一 婦人の通有性 | 第二 人生と戀 |
| 第三 戀の發動 | 第四 一時的戀愛 |
| 第五 虚誇的戀愛 | 第六 着實的戀愛 |
| 第七 令夫人の戀 | 第八 細君の戀 |
| 第九 内儀の戀 | 第十 嬢の戀 |
| 第十一 後家の戀 | 第十二 外妾の戀 |
| 第十三 令嬢の戀 | 第十四 女學生の戀 |
| 第十五 町娘の戀 | 第十六 下婢の戀 |
| 第十七 藝妓の戀 | 第十八 娼妓の戀 |
| 第十九 都會と田舎 | 第二十 婦人戀愛概説 |

葛城天華君著 正價金廿五錢
岡 落葉君畫 郵税金四錢

女義太夫の裏面

(寫眞版挿入)

女義太夫の裏面を描きて **周密精細**、諸君はその意外に驚きうの墮落に愕くべし。

著者多年 **探索の結果** 此に本書を著はして、世を警醒せんす

附録には、小説的の短篇、**女義太夫の人名表**、**語物一覽表**を添す。

原田東風君著 正價廿五錢
岡 落葉君畫 郵税四錢

社會の裏面 乞食

乞食とは何ぞ **最下級** に位するや、生活程度の **遊民** なる、社會の風教上最も忌むべきものなり、一團體をなして活動せり、一なる **戀愛** あり、婚 **教育** あり、道

間に **交際** あり、階級と **放蕩墮落** の然り

生活の狀態は如何、其始めてどうの終りは如何、不具癡疾 **不幸災害** の然らしめし乎、か、**實地踏査** の後に成る

岩崎徂堂君著岡落葉君畫

田中正造奇行談

肖像筆蹟入 (再版)

正價廿五錢 郵税四錢

明治の佐倉宗五郎 **誰ぞ**

鑛毒問題 **誰ぞ** 十年一日の如く狂奔

人なり翁が行 **熱血の餘** に出て墮動たる總て **落社會** に

在ては寔 **模範** たるものあり本書は翁に人の **か幼時より今日に到る**

逸話奇行 を蒐めたるもの、寔に近時有益の書なり。

東臺隱士著 岡落葉畫

名士の交際術

正價廿五錢 郵税四錢

本書は田中正造、佐藤鬼少將、江木衷、北垣男爵、久保田讓、高木辯護士、平岡浩太郎、大隈伯 **現今有名の**

爵、頭山滿、其他 **應接**

人士 せられたるか如何に **訪問し實見**

し如 **談話** するか **訪問し實見**

極めて **寫實的評論的** の筆を

きたるもの、一讀 **面目躍如** とし

原田東風著 岡落葉畫

暗黒の青年時代

正價廿五錢 郵稅四錢

恐る可^い警^めむ^{べき}は青年時代なるかな。惡

魔^耳に妖鬼^袖を惹く、郷關を出つ

固なるや歸郷果して幾人か錦繡と纏ふ

や、吁、暗黒なる前途に光明

は青年時代なり、前途に光明

を認^め 一道の活路を得んとする

に依^て準備せよ警戒せよ、

押川春浪君著 岡落葉君畫

空中大飛行艇

正價廿五錢 郵稅四錢

春浪君の著 愈々出て愈々奇

なり、「奇人の旅行」は膽豆の如き小人輩

を驚かし「世界碧眼豚尾」の膽を

武者修行」は「空中大飛行艇」

「空中大飛行艇」世界万国に驚

に至つては「新發明」をやり

るものあらんや「軍艦」また必要を見

「新發明」をやり「軍艦」また必要を見

戦は正に空中大飛行艇に依る行文流暢肥

事の快例の如し、

原田東風君著 小山榮達君畫

木賃宿

正價廿五錢 郵稅四錢

社會の暗面先づ下層の生活を

研究す可し下層の生活を探らんと

最も適切にして複雑なる木賃宿を観察す

るを便とす木賃宿の活寫はよく社會の罪惡

亂調病源を指摘して除蘊なから

に非ず著者苦心慘膽の處唯その

密なる觀察に止まらずして活寫の筆法に存

する又一部の好小説

原田東風君著 岡落葉君畫

貧民窟

正價廿五錢 郵稅四錢

勞働問題、社會問題、風俗宗教

等々に力を盡しつゝ、あ

る人士は第一に貧民窟の現状に精

通せざる可から空論の喧々たるに

比してこれが状態生活を寫したるの書甚だ少し

著者これを慨し親非常の苦心

を以て本書を作らる行文極めて趣味あり

彼の徒らに統計的記實的のものと同一の

比に非ず、

正 價 押川春浪君著
二十五銭 岡落葉君密畫

第一編 奇人の旅行

世 界 怪 奇 譚

四 郵 錢 税 一九が 膝栗毛 の中 押込 らる可し

奇人の旅行は世界怪奇譚の第一編として顯る。夫れ 旅行の趣味は千變万化にあり之に配するに奇人を以てす故に如何に本書が 意表に出づる。記事を以て満たされたるかを知らしめ、本書一度世に出だされたらんには彼の 膝栗毛 は最早本箱

押川春浪君著
岡落葉君密畫

第二編 世界武者修行

正價廿五銭 郵税四銭

一丈夫 金剛の如意棒を掲げ 剛勇を顯す 黄金と見ること 土芥の如く 蘇生の道を得、世界 貧者弱者、碧眼の膽姿豚尾の 如く、眼眩の 卷を掩ふに忍びざらしむ寔に 眞正の大和魂を發揮して 偽 文明を属倒するものは本書なり

駿臺隱士著

學生座右叢書第一編 最近記憶法

正價廿銭 郵税四銭

記憶力と理解力 力とは修 學の二大

原素なり、而かも記憶力は 年齢の増加と

反比例の傾向を有す、畢竟

修練缺乏の結果なりとす著者從 來の經驗と苦心の結果

實用に最近の方式を採り極め 適せる

文字を以て書かれたるもの即ち本書なり

涵養社編纂

學生座右叢書第二編 新式勉學要訣

正價廿 五銭郵 税四銭

本書は勉學の要訣を新式と取り中 敘述するに極めて

最良の参考書たるを期した

國語、數學、國語、作文、歴史、地理、

漢文等 普通學の最要科

目に就てこの研究方法を親切丁寧な

博士學士等 皆方今 有名の 大家

木村鷹太郎君著

ロニイ 文界の大魔王

正價四
十錢郵
税六錢

色刷寫真版數葉挿入

本書はロニイ 幼時より終焉に
ロン卿が

るの生涯次を逐
うて精細その 性格の戀愛のそ

文字の思想悉く叙説
し評隲し眼光

炬の如し狂熱詩人が
の如し狂熱詩人が筆勢火の如し狂熱詩人が
の如し狂熱詩人が

人が面前に髣髴たらんとす寔に寂寞たる

文壇 一道の活氣を興へたるも
のと言ふ可し

與謝野鐵幹君著

新派和歌大要

正價廿五錢
郵税四錢

本書は鐵幹君が多年の間初學者の爲め、

親切叮嚀して 註釋、評

論、説話せられた
るすべて新派和

歌に關する著作を蒐録
したるもの、實に歌壇の

珍と稱す可し、

豪傑叢談

洋裝 全 部 拾 冊 正價五錢 郵税四錢

第壹編 宮崎來城君著 多情の豪傑

第貳編 宮崎來城君著 豪傑の臨終

第參編 宮崎來城君著 豪傑の少時

第肆編 岩井松風軒著 豪傑の遺訓

第伍編 宮崎來城君著 豪傑の雅量

目次左の如し
○源朝朝○源朝經○平重衡○木曾義仲○曾我
祐成○楠正行○藤原藤房○高師直○尊良親王
○高師秋○新田義貞○新田義興○平兼盛○柴
田勝家○平維盛○豊臣秀吉
豪傑の氣象は臨終の間に於てこれを見る、來
城子獨擅の健筆を振つて無數の古豪傑が臨終
を描く一讀惻夫も起つ可く鬼神も泣くべし
蛇は三寸にして人を呑むの慨あり、豪傑の豪
傑たるはそれ天品に依るか又聞く大器晩成の
語あり豪傑の豪傑たるはそれ鐵練に依るかこ
れを知らんと欲せば須らく豪傑か少年時代の
言語舉止に徴せよ
創業は易し守成は難し、英雄の苦心はその子
孫の業に在り、遺訓を遵守するもの以て榮へ
背戻するもの衰ふるは歴史に徴して明なり、
有爲の青年なるもの一冊を座右に置いて朝夕
の鑑とすべし
諸豪傑が亂世に於ける慣用手段たる權謀術數
以外に一種の天真潤達なる襟度を以て人を迎
へたる絶好の逸話、茲に例の健筆を以て寫し
出されたるもの一讀光風霽月の想あらん

豪傑叢談

正價拾五
附録五
四冊拾五
錢稅錢貳

全 部 拾 冊

洋 裝
本 裝

第六編 西山筑濱君著 **豪傑の交際**

第七編 岩井松風軒著 **豪傑の信仰**

第八編 西山筑濱君著 **豪傑の修養**

第九編 宮崎來城君著 **續多情の豪傑**

第十編 西山筑濱君著 **豪傑と奥方**

(十八)

交際は即ち處世法なり交際に拙なる者は世に
 運るゝは自然の數なり、異色異種の人物交々
 來り接す此間に處して如何に談話し如何に待
 遇すへきや豪傑が苦心また甚たしきものあり
 此書これを説いて些の餘蘊を見す

英雄豪傑の壯業偉蹟は實に堪れが信仰の産物
 なり、神か、佛か、人が物か、道か、理か物
 か渠等は其の一の或ものを崇拜し以て志を成
 したるものなり本書詳に之を謂ふ

大事業の下には大なる準備あり偉人の素には
 大なる修養あり修養は活動の第一義なるの語
 を知る者須らく此書に就て如何に英雄豪傑か
 その素養に力むるに困苦勉勵せしむるを見よ

曩に、多情の豪傑一編を著して滿天下の耳目
 を驚倒したる著者更に其洩れたる戦國の勇將
 猛士が情事を寫す現存傳記の筆致は脱くを用
 わず讀む者恍惚として自失せずんば幸のみ

豪傑を知らんとするに先づ夫人の研究を要
 す、女子が男子に及ぼす勢力等大なるものあ
 りればなり、此書或は叙説し或は評論し俊雄と
 佳人双々點綴する處一部小説を讀むの感あり

文學士白河鯉洋君序 宮崎來城君著 **楊貴妃** 第五版 正價廿三錢 郵稅四錢

帝國大學教授內藤耻叟先生序 黒河内與四郎君著 **靜御前** 第四版 正價參拾錢 郵稅四錢

文學博士三宅雪嶺先生序 岩井松風軒君著 **小野小町** 參版 正價廿五錢 郵稅四錢

松村介石君序 光井深君著 **學生自活法** 再版 正價拾五錢 郵稅四錢

文學士梶川鳥城君序 林稻洲君著 **理想の良人** 正價十七錢 郵稅二錢

(十九)

讀者風に漢文學に精通し濟國に歴遊して人間未見の
 雙の國色を描く材料新にして雙の筆を以て天下無
 双の國色を描く材料新にして雙の筆を以て天下無
 双の國色を描く材料新にして雙の筆を以て天下無
 双の國色を描く材料新にして雙の筆を以て天下無

帝國大學の奇珍に於て、鎌倉時代國史を專攻せし著
 者が數十の資料を御前か幼時より其最期に至る迄
 なる健康に依りて詳物せられたるもの殊に其最期と
 の如きは正に詳細を極むるの坊間散漫杜撰の關係
 は同一の談に在らざるなり

極美の女流として、非凡の歌仙としての小野小町が
 九十二年間の生涯の榮枯盛衰を叙したるもの材料は
 正に確證富文の流麗は暢達從來不可思議の裡に疑
 を決せられたり

都下何十萬の學生の中能く其業志を貫くもの幾人か
 ある多きは惡魔の爲めに病覺の爲めに半途にして
 郷里に歸るもの失敗するの種を接ぐにあらずや
 なれりか故に光井君の此書は憂ひて此書あり立脚歩
 べし母事親切丁寧にこれ學海の羅針盤たりと言ふ

此書は未だ結婚の男女兒を執るて父母兄弟の一説を要
 す、未だ結婚の男女兒を執るて父母兄弟の一説を要
 す、未だ結婚の男女兒を執るて父母兄弟の一説を要
 す、未だ結婚の男女兒を執るて父母兄弟の一説を要

笹川臨風君序 田岡嶺雲、宮崎來城君合著

俠文章

文學士辰己小二郎君序 岩井松風軒君著

遊仙窟評釋

以て知る可し、本書は訓讀解義、解の三點に分ち最も平易の語句を用ひ通俗的に評釋したるものなり。

長恨歌評釋

宮崎來城君序 吉田谿南君著

唐人美人傳評釋

女流の偉人

宮崎來城君序 金田雪窓君著

正價廿五錢 郵稅四錢

第 四 版 再 正價廿五錢 郵稅四錢

再 正價十三錢 郵稅二錢

正價廿五錢 郵稅四錢

第 四 版 再 正價廿五錢 郵稅四錢

同輩の奇傑兒、嶺雲來城の二氏、天下を跋渉し、事に感ずるもの即ち此、文章なり奇辯、亦拔、一語をめぐらすの能あり、現奇、龍虎相闘ふの觀あり、讀むるに、泣く再讀むるに怒る。

遊仙窟は唐の文張威が仙女に託し、戀愛の眞想を叙したるものにして、文章の麗巧、餘華、前事、空、總して附せらるるに於ては、十有餘年前、學士、伊、受たりと、曉、天皇の命を承け、その下に、讀、當り此書に、龍、馬、等、景、色、人、情、を、叙、するに、長恨歌は唐の文豪白居易の傑作也、○全篇百二十句の長詩也、○玄宗皇帝好色、の、末、也、○美人楊貴妃の、也、○作詩、文、の、機、軸、也、○青年、學生、座、右、の、珍、寶、也、

本書は驚々傳、章臺柳傳、楊妃傳並に琵琶行を訓讀、釋、義、に、分、ち、最、も、通、俗、に、解、釋、せ、る、もの、なり、來、城、氏、本、書、に、序、し、て、曰、く、方、今、文、士、の、漢、文、を、讀、む、も、多、く、は、六、家、の、八、家、の、四、原、を、讀、む、の、外、復、た、片、眼、の、辭、に、涉、る、な、し、之、を、矯、む、る、は、道、徳、の、文、を、示、し、把、玩、三、味、以、て、別、様、の、詩、情、と、別、様、の、文、情、を、知、り、し、む、る、に、在、り、と、

本書集載せる所一切、我邦の國媛才女に似り、毫も異邦の人物を加へず、これ、我邦に、は、我邦の奇辨あり、特色あり、神、體、あり、精、華、ある、所以、にして、或は總行を以て著はれ、才、色、を、以、て、勝、る、必、す、し、も、一、定、せ、ず、而、し、て、書、中、に、校、書、超、欄、を、挿、記、する、は、砂、漠、の、黃、金、泥、中、の、蓮、花、な、き、に、非、さ、る、を、以、て、な、り、苟、く、も、世、の、婦、人、貞、婦、賢、母、と、な、る、志、あらば、必、す、一、本、を、備、へ、さ、る、可、から、ず、

文學士辰己小次郎君序 岩井松風軒君著

淀君と太閤

本田種竹君序 長田偶得君著

維新豪傑の情事

渡邊修二郎君著

大久保利通の一生

文學士飯田吹萬君序 帝國大學侯野節村君著

偉人の言行

渡邊修二郎君著

青年と立身出世

第 四 版 再 正價廿八錢 郵稅四錢

第 三 版 再 正價二十五錢 郵稅四錢

再 正價三十錢 郵稅四錢

再 正價廿五錢 郵稅四錢

再 正價廿錢 郵稅四錢

志願の徒、行の徒、安んじ、文に、英雄の皮相を、學んで、精神を、解す、天、下、を、跋、渉、し、事、に、感、ず、る、もの、即、ち、此、文、章、な、り、奇、辯、亦、拔、一、語、を、めぐらすの能あり、現奇、龍虎相闘ふの觀あり、讀むるに、泣く再讀むるに怒る。

風、流、九、死、の、間、に、於、て、猶、且、つ、て、優、々、餘、裕、ある、英、雄、千、軍、萬、馬、の、聲、を、聞、か、ず、美、人、の、膝、を、枕、す、て、は、握、る、天、下、の、權、を、握、る、氣、を、吐、く、餘、り、の、英、傑、の、如、き、も、淀、君、と、太、閤、に、在、り、と、

本、書、は、龍、馬、野、利、日、月、の、逸、興、を、寫、す、に、絶、倫、な、り、且、つ、て、維、新、の、精、神、を、傳、へ、し、て、予、を、驚、か、せ、し、る、所、也、○、龍、馬、の、逸、興、を、寫、す、に、絶、倫、な、り、且、つ、て、維、新、の、精、神、を、傳、へ、し、て、予、を、驚、か、せ、し、る、所、也、

立、身、成、功、の、事、偶、然、之、を、求、む、可、から、ず、然、ら、ば、其、策、如何、即、ち、唯、健、康、教、育、を、實、行、す、る、事、と、百、折、不、撓、の、精、神、と、是、れ、な、り、今、年、成、功、の、道、を、解、き、分、つ、る、事、と、十、箇、條、の、因、を、切、切、に、記、し、今、世、人、士、の、生、活、を、分、つ、る、事、と、大、學、生、特、別、に、各、藩、録、進、生、表、の、三、篇、を、添、へ、た、り、實、に、机、上、の、好、讀、物、也、

文學博士井上哲次郎君題字 文學博士元良勇次郎君序
希臘人キセノオオロン著 木村鷹太郎君譯

テラス 人物養成譚

公爵近衛篤磨君序 島田三郎君序 法學士桑田熊三君序 法學博士中村進午君序
柳瀬勁助君遺著

社會外穢多非人

岩崎徂堂君著

人物と長所

岩崎徂堂君著

明治豪商苦心譚

岩井松風軒著

情の清盛

本書は「ソクラテス」の無二の愛読書なり。本書は
ソクラテス各種各異の人物を養成したる奇蹟の方法
に於て、ソクラテス本人の生活、信仰、道徳、婚姻、職
業、交際、起原、人口、繁殖、沿革、過去、將來、救済法
を研究し、其結果を公表するに至らずして遠逝せられ
し柳瀬勁助氏の遺著にして、別天地たる社會の奇習
一として洩らすことなし。

此書に掲げる人物は皆是れ現時社會に活動せる活人物
に對して其長所を描く極めて發達切其間滑稽あり
所は彩霞白霧の間に點綴して天地の壯觀を呈す

虚手巨萬の富を作り、空拳經濟界の霸權を握りつゝ
ある豪商大賈が今日の地位を致したる苦辛はそれ如
何、富を養ひ名を欲するの人は須らく先づ此書に就
て悟る所あらん。

人間を觀察するに最も趣味あるものは、是れ情也日
本史上の逸名物、平相國を見るに此一面よりす、何
ぞ折花の逸名物と云はんや、何ぞ柳の生命を與へて人
や、能く百の花の爛漫たる春光を此書の表に現出せし
めんとするその花の爛漫たる春光を此書の表に現出せし
めんとするその花の爛漫たる春光を此書の表に現出せし

渡邊修二郎君著

奇傑雲井龍雄

渡邊修二郎君著

俠傑高田屋嘉兵衛

押川春浪君著 寫真版挿入

航海奇譚

柴田流星君著 寫真版挿入

海之冒險

き何等の快事ぞ、海國の男兒は敵なき海に死せざるなり、

渾身骨髄、奇習奇行、妙たる一書生の身を以て徒手破
天驚地の壯觀を試み、終に奇蹟を得て刑場一片の露
と消へたる明治初年の快男子雲井龍雄が幼時より其
斬首に至る間の性行、奇事を輯めて一編の傳となし
たるもの附録に雲井龍雄文藝を掲ぐ。

嘉兵衛是れ市井の一夫のみ、而して國家の爲に犧牲
となりて海外に捕はれ、國辱を辱しめ、一機千鈞
の難關に處して彼我の間の事情を疎通し、寛に平和に
事局を了するを得たり。嗚呼、焉ぞ傳せざる可けんや
著者頭日露人の記録等を得て材料頗る豊富なり、日
露交渉の事蹟は其多趣多味なること遙に小説神史の
上に在り。

大洋と言ふ已に快也、航海と言ふ已に壯也、奇譚とい
ふに至つては競うて讀まざる能はず、太平洋を馳る
船大西洋に沈む船甲板に起りたる神鬼出沒の活動、
奇絶にして趣味多く快絶にして感興甚だし、
目一海上の怪、孤島の奇遇、幽霊島の寶藏人、海軍
次一士官、無名の碎、俠血男兒二人胡弓師、

英國の少年は好て冒險小説を讀む、而もその重なる
は海に關するものなり、英吉利本國の人々か四六時
中日を見ざるなしと誇るに至る亦宜哉海の冒險は海
の日本人かなざる海の事象を叮嚀に親切に正直に述
べたるもの金華山沖に暴風と戦ひ占守島に郡直は海
と談下露領コマンドルヌキ島に萬歳を唱ふるが如

博言博士イーストレーキ君著
英作文添削詳解

再 正價廿三錢
版 郵税二錢

「イ」氏門生の英作文多を撰集して、字々句々に精
密の添削を加へ、其全文には全體の評論を下し、以
て英作文練習の方針を示し、邦文を以て添削評論の
理由を解説したる英學界未曾有の珍書なり。

博言博士イーストレーキ君著
英和 **日用單話自在**
通辯

第三 正價參拾錢
版 郵税四錢

英米日用の慣用語句一千數百を集めて之を二十種に
類別し同氏自ら正確の發音を施し加ふるに末尾に單
語數百をも類別に附しあれば初學者は勿論特に中學
生座右必須の良書なるべし。

菅野徳助君著

フランクリン
自叙傳詳解

再 正價參拾錢
版 郵税四錢

國民英學會講師として「實用英語」記者として英文
の註釋を以て芳名噴々たる菅野氏が其精緻なる頭腦
により詳細の註解を下せしものなれば坊間流布の類
書の香と其の選を具にするは勿論實に中學生必携の

文學士宮本正實君序 虎城山人編

作文助字用法詳解
必携

四 正價十五錢
版 郵税貳錢

●也、矣、焉、乎、哉、耶、耳、爾、已、殆、幾、夫、抑、●即、乃、故、即、便、猶、尚、仍、等、の、助、字、對、百、を、類、集、し、各、字、の、意、義、用、法、異、同、等、皆、實、例、を、舉、て、詳、説、せ、り、

侯爵西園寺公望君題字 岡鹿門君序 財間榮君編

作文熟語成句詳解
必携

四 正價廿五錢
版 郵税四錢

故、字、熟、語、數、千、を、集、め、て、之、を、精、密、の、電、氣、文、字、の、出、處、故、事、來、歴、を、詳、説、し、之、を、精、密、の、電、氣、文、字、の、出、處、し、尙、ほ、索引に便なる爲め種類目錄をも付し別
引用に便にして、文筆に従事せるもの座右必須の要
典なり。

文學士宮本正實君序 虎城山人編

漢文和文漢譯秘訣
速成

正價十五錢
郵税貳錢

和語を漢語の語勢に變更する練習法なり復文十數例
を擧げて、漢字、虚字、助字の用法及語句の轉倒配置を
一字一字詳説し又譯文の異同を識別し譯文の運用例
代を會得せしむる爲同一文を數種に漢譯したる名家
の和文漢譯例を示し譯文の方法秘訣を詳説せり。

法學士 加藤正雄君序 南海道人編 (挿畫三十二個)

書法習字速成圖鮮
秘訣

再 正價十五錢
版 郵税四錢

本書は永字八法、草字體法、一文字五形修練術、忍返
し筆法、執筆法等を總て圖を以て詳説し、其他執筆、運
筆、姿勢、習字、四修、習字、文學之體、筆勢、筆拍子、去
欣、黒色生字、死字、病字等の秘訣、魏大祖、王羲之、晉成
帝、柳公權、東坡等の書法秘意より書體の種類、筆道
の用具に到るまで詳細不漏。

涵養社編集

現代青年の憲法
大家

三 正價廿錢
版 郵税四錢

如何にせば成功すべ乎、諸部幾萬の學生が日夜焦慮
する問題は不幸にして往々解決せざるものあるは何
ぞこれ精神を頹みずして形式を學ばばなり、本書等
に此等の弊を矯めて青年の福資たるを得べき乎、十二
大家の青年教育談は本書獲得の大事なり。

編纂社編纂

中學新式勉學要訣

正價廿五錢
郵稅四錢

學を務むるに法あり法を誤れば貴重なる時間と莫大なる金銀とを散りて得る所警のみ本書は此の弊害を矯めて偏に青年が勉學の指南たらんを務めたれば中學生には宜しき參考書たるを得べし

西山筑濱君著

戰國時代少年武者

正價廿五錢
郵稅四錢

少年武者が活動は果して如何筑濱君の筆これを描いて面目躍如せんとす風血雨の巷その絳威の如何に愛らしきよ、月光花影の下その小姓姿の如何に

岩崎祖堂君著

名士の兄弟

正價廿錢
郵稅四錢

世の中に愉快なる事少なかられど其中にも一つ腹から生れ一つ處で育ちと成長して共に育雲の地位に昇つた兄弟が漸々と成り長して共の書は現今有名なる兄弟の愉快な事はあるまじいこの書は現人の爲めに大に立志の興奮劑となるであらふ

須藤誠山君著

名士名家の夫人

正價廿五錢
郵稅四錢

古今東西名を擧げ産を興すの人士は其夫人の内助たるに依るもの多し、世に名士名家の傳記逸話の行はるゝや久し、獨り夫人に關するもの無かる可けんや本書は平易にして項目順る饒多讀んで面白く且つ有益なり

押川春浪君譯著 寫真版數葉入

世界怪奇談 第二編 世界武者修行

正價廿五錢
郵稅四錢

如意棒を掲げて天下を横行する快男兒が驚天動地の活動は如何、碧眼鬚髮尾叩犬す壯快痛絶

平野紫陽君著

文學奇瑞談

正價廿五錢
郵稅四錢

天地を動かす、鬼神を泣かしむ和歌の功大なる哉武士夫婦の情を和ぐる俳諧の徳偉なる哉和歌俳諧の功徳は更に言はれざるも詩歌の神佛を感應する功徳其の奇中争ふ可からざるもその消閑の具には無比の奇瑞不思議の逸話を蒐録せるもの消閑の具には無比の好書にして又得易からざる參考書なり

巖谷漣山人序 生田葵山人著

少年小説 進撃隊

寫真版挿入
正價廿五錢
郵稅四錢

生田葵山人が「少年英雄」を綴きたるものは必ずやこの「進撃隊」を讀まざるを得ざるべし、少年の血氣向ふ所鬼神を泣かしめ、山嶽を撼動し、好敵の少年山人の筆に依りて愈々活動し破天荒の事業を演ぜんとす、挿繪鮮麗亦以て机上の珍とするに足る、

宮崎來城君著 岡落葉君筆寫真版數葉入

無錢旅行

寫真版
正價廿五錢
郵稅四錢

旅行の面白味は汽車に在らず、汽船に在らず、馬に在らず、車に在らず、所謂徒歩無錢にて千山萬壑を跋渉する中に在り風を餐み、露を飲み、食と合宿するなど辛苦の中に在り、然れども、其の味を盡せり以て如何に愉快なる暇物なるかを知らず、

宮崎來城君著 岡落葉君筆寫真版數葉入

乞食旅行

正價廿五錢
郵税四錢

腹に高登の書を貯へながら旅行のしたまに鉄板を片手に乞食の仲間入りして彼處此處と經つた境に於てその趣味の多い事を悟るてあらう

矢野滄浪君著 寫真版挿入

無錢旅行 食客

正價廿錢
郵税四錢

本書は著者が實踐せし事柄を言文一致を以て描かれたるものにして食客が辛酸な苦境を起さずして生活するに近きものなり其學の衛生に比して趣味を興ふること甚多し

巖谷遯山人著 生田葵山人著

少年 少英雄

寫真版數葉挿入
正價廿五錢
郵税四錢

生田葵山人が少年小説に獨得の筆を有するは既に文壇の公評たり此書は山人が田園生活の數ヶ月間に於ける苦心經營の作數篇を蒐めたるものにしてその主眼は如何に少年が天賦する所なるか試中の試してその好伴侶たるを知り玉ふ

原田東風庵著 小山榮達君著

木賃宿

正價廿五錢
郵税四錢

社會下層の狀態を描いて精細、初くも貧民問題勞動の實情に關して露骨するの士は一讀せざる可からざるの奇なり社會の暗面を露ぼし人々を最も適切なる参考書なり

12/1/26

長田偶得君著 岡落葉君書 三版

逸事 明治六十大臣

正價廿五錢
郵税四錢

明治十八年内閣制度改革以來今日に到る迄の大臣六十人の逸事奇談を描きたるもの大體服きて威儀嚴然たる大臣は横身一枚の裸男となりて讀者の前に現れる可し

岩崎徂堂君著 岡落葉君書 三版

中江兆民奇行譚

正價廿五錢
郵税四錢

明治の奇男兒中江兆民居士が奇行奇行を描きたるもの滑稽あり嘲罵あり諷刺あり狂態あり一讀巻を捨つるに及びす

押川春浪君著 岡落葉君書

世界怪奇談 奇人の旅行

正價廿五錢
郵税四錢

世界怪奇譚の第一編として著者の尤も苦心する所は尤も趣味多くして有益なる書なり

押川春浪君著 岡落葉君書

怪人奇談

正價廿五錢
郵税四錢

表紙に人目を驚かすより見て如何に記事の奇怪なるを推想するに足らん人外狂、奇狂士、戰場の花々詩趣ありて、讀者をして飽く事を知らしめず

緒方流水君序 石橋玄潮君著

新體詩指南

正價廿五錢
郵稅四錢
新體詩の性質を明にし、其作法を詳説し、附する語之が模範たる作例と、之を組織すべき資料たる類に於て何れにか之を求めん、新體詩自修の指南車は本書を措

石橋玄潮君編

韻花天月地

正價廿五錢
郵稅四錢
本書收むる所は當時有名の新體詩人の作にして其華を抜き其精を選ひて之を集む、其致七十有餘、類に是れ四時花鳥風月の友天地の有情を教ふるものは即ち之なり、

文學士栗田木岡君序 渡邊幾石君編

美文美辭麗句

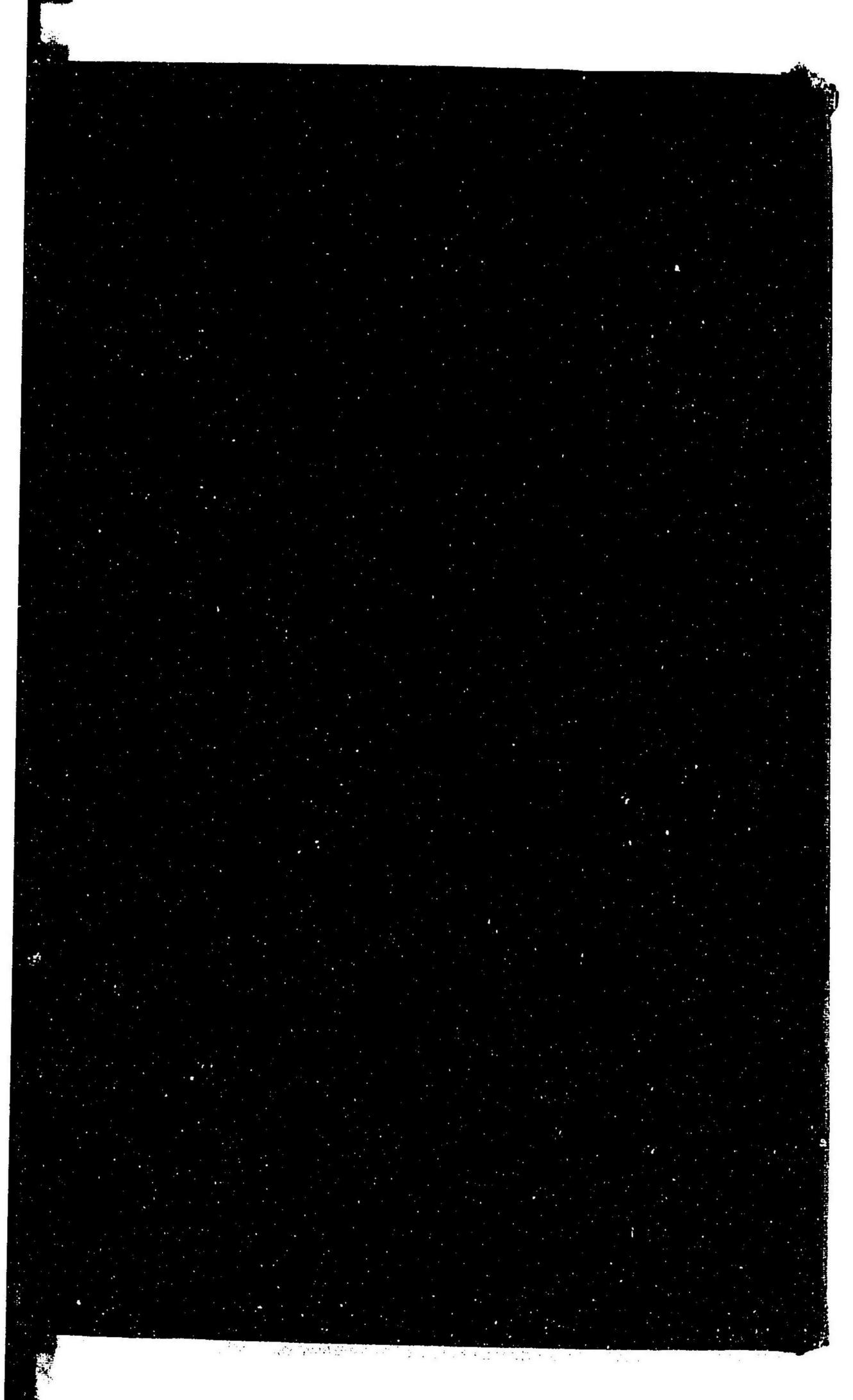
再正價廿錢
郵稅四錢
本書は部門を季候(春、夏、秋、冬)地理、天文、人品、品性、人情及人事等に分ち更に百有餘の細目に分ち以て索引の便を計れり、選し作文の好資料にして苟しくも文筆を弄するの士が座右の友として裨益少なからざるを信す、

國府犀東君序 香川怪庵君述

文士政客風聞錄

正價拾五錢
郵稅貳錢
方今其名噴々たる政治家、文豪が研話珍聞を蒐めたるもの、滑稽あり、洒落あり、豪放あり、奇矯あり、風流あり、慷慨あり、面目躍如として紙上に活躍す、

96
46



96
46

Ⓜ

023067-000-2

96-46

野宿旅行

鐵脚子 / 著

M35

ADB-1072



